HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教員養成のための地方小規模大学間連携の考察 ： 模擬授業交換会の実践を通して
Author(s)	齋藤, 眞宏; 菊地, 達夫; 菊池, 葉香
Description	第24回日本教師教育学会ラウンドテーブル2014年9月28日（玉川大学）
Issue Date	2014-09-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57069
Type	conference presentation
File Information	saitoumasahiro20140928.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

教員養成のための地方小規模大学間連携の考察 – 模擬授業交換会の実践を通して –

【話題提供者】菊地達夫（北翔大学短期大学部）／齋藤眞宏（旭川大学）
【ゲスト・スピーカー】菊池葉香（北海道教育大学札幌校４年）

１部　話題提供
１．大学間連携としての模擬授業交換会

齋藤　眞宏（旭川大学）

（１）本ラウンドテーブルの流れ

16:15～16:25	参加者自己紹介
第１部　話題提供	
16:25～16:35	趣旨説明（齋藤）
16:35～16:45	学習者の立場から（菊池）
16:45～16:55	模擬授業交換会からの学生たちの学び①（菊地）
16:55～17:05	模擬授業交換会からの学生たちの学び②（齋藤）
17:05～17:10	質疑応答および簡単な事実確認
第２部　地方小規模大学教職課程連携の可能性について	
17:10～17:30	討論①：会場からの意見および話題提供（実践事例の紹介）等
17:30～18:00	討論②：地方小規模大学連携の可能性について（グループ討論）

（２）模擬授業交換会を行う意図

学生減に苦しむ地方私学においては教職課程において学びの共同体の構築のために十分な学生数を確保できているとはいいがたい。特に面積が広い北海道では、大学がある地域は偏在しており、また札幌を別とすれば同一教科の教職課程を併設している大学が複数存在する都市はない。そこで従来の大学連携からさらに一歩踏み込み、３大学合同で模擬授業交換会を実施した。

（３）模擬授業交換会の意義

- 従来の模擬授業においては往々にして「身内」であるために学生が互いに「甘える」傾向にあった。
- それを払拭するために従来の単位互換を越えて、複数大学所属の異なる専門分野を持つ教員および学生がひとつの授業について議論する。
- 「他者の目」「多様な目線」を意識することによって、将来の専門職として授業者の自律的な職能発展を促したい。

（４）これまでの流れ

① 2009年度　模擬授業交換会（2009年12月）：旭川大学／苫小牧駒澤大学

② 2010年度　模擬授業交換会（2011年1月）：旭川大学／苫小牧駒澤大学／北翔大学短期大学部

③ 2012年度　模擬授業交換会（2012年12月）：旭川大学／苫小牧駒澤大学／北翔大学短期大学部

※2011年度模擬授業交換会は2012年2月に予定されていたが吹雪のために中止。

④ 2013年度　模擬授業交換会（2014年2月）：旭川大学／苫小牧駒澤大学／北翔大学短期大学部

⑤ 2014年度　模擬授業交換会（2015年2月21日を予定）

（５）模擬授業交換会の流れ（2013年度）

① **主催者挨拶（苫小牧駒沢大学　伊藤勝久先生）**

② **公開授業１　小学校社会科（地理）**

授業者：北海道教育大学札幌校2年（北翔大学短期大学部こども学科卒業生）菊池　葉香

③ **公開授業２　中学校社会科（公民）**

授業者：旭川大学３年　学生A

④ **公開授業３　高校公民科**

授業者：苫小牧駒沢大学３年生

⑤ **全体講評（旭川大学、苫小牧駒沢大学、名寄市立大学非常勤講師松田剛史先生）**

※各授業前に授業の意図や狙いを授業者が説明した。

※各授業のあとに３０～４０分の質疑応答・意見交換を行った。

（６）参加学生への注意事項

- 授業者の教育観や教師観，授業観を意識してコメントを書く。
- 極力、多面的・多角的に授業を観る。
- 授業者のことを考えて，その人の成長に寄与することをしっかりと意識をもち，自分ならこういうことを言ってほしい（観ててほしい）という視点で評価を書く。
- 自分が生徒だったらこの授業を受けたらどのように感じるか，自分の生徒がこの授業を受けたらどのように感じるか想像しながらコメントを書く。
- **誹謗・中傷は絶対に書かない。**
- 出来る限り改善点を明示しその理由も述べ，授業者のリフレクションにつながるようにしてください。

２．学習者の立場から

菊池葉香（北海道教育大学札幌校4年）

（１）授業交換会の効果

- 教職をめざす学生としてステップアップできる

  →学会や研究会よりも参加しやすい

- じっくり教材と向き合える

- 他大学の学生との意見交流ができる

  →新たな視点・指導技術の開拓

（２）他の学校種・教科との連携

+ 学校間・教科間のつながりを意識することができる

→とくに他学校種・教科の授業を見て

+ 発達段階に応じた配慮に気付くことができる

→字の大きさ，話し方，指示の方法など

（３）今後の課題

+現場の先生方が参加できる環境づくり

→幅広い意見交流の場に

+模擬授業実施者の増加

→他大学生の参加，分科会形式の検討？

２．模擬授業交換会からの学生たちの学び①

菊地達夫（北翔大学短期大学部）

（１）模擬授業交換会参加の意義
―小学校教員養成課程の立場より―

●本学科は、保育士、幼稚園・小学校教員の養成課程のため、中学校以上の教員養成課程の科目設置がなく、その様子（接続）を知る場となる

●北海道の場合、小学校教員養成課程は、長年、本学科と北海道教育大学のみで、卒業後も含め、情報交流をする場が少なく貴重な交流の場となる

●近年、保育者の志望が大半を占め、小学校教員の志望者が、学内で模擬授業する機会が減少したため、実践経験を積む場となる。

（２）模擬授業準備の流れ

～4ケ月前

- 模擬授業実施者の募集呼びかけ（１～2名）
- 模擬授業者の確定（小学校社会科の内容）

～1ケ月前

- 授業内容の構想（３・４年、5年、6年から選択）
- 学習指導案作成（添削指導）、教材準備

事前後

- 準備授業（45分授業）の実施（事前指導）
- 模擬授業内容の講評（事後指導）

（３）授業者（学生）に対する受講生の声ー小学校社会科5年生の授業内容ー

- 児童を想定した発問の仕方をしていた
- 児童は先生の態度や言動で、印象が変わることが多く、安心感を与えるような話し方をしていた
- 発問→児童意見→発問→知識の深化といった授業の流れ、板書、資料活用が良かった
- 資料を活用しながら、楽しく授業を受けることができた

３．模擬授業交換会からの学生たちの学び②

齋藤眞宏（旭川大学）

（１）学生Aの感想

① 授業経験は本人の中では整理しきれていない。

+ 思ったよりも評価されているように感じた。「もっと言葉遣いとか、選んでしゃべった方が良いとか言われると思っていた」「そういう（批判をしない）雰囲気だったのかもしれない。」

+ （「授業者へのメッセージ」の中で）「個性的だった」という意見が印象的だった。しかし自分はそうは思っていない。

+ （「わかりやすかった」と言ってもらえたが）「不完全ながらも、全力を出すと言うことを念頭に置いてやっていたから」言ってもらえたのではないか。

② 「心地よさ」そして「不完全燃焼ではなかった」

③ 模擬授業交換会で何かを学んだというよりは、その準備過程において学んだことが大きかった。

（２）学生Aの学び①

協同学習を通じて授業における大事な知を獲得する

【準備段階での学び】

+ チームで学ぶ大切さ

「最初は一人だった。一人でやっているとひらめきがない。問いかけるのも自分ですし。」「周りから自分が気がつかなかったことを指摘される。」

+ 授業の幹をしっかり見いだして、それに沿った働きかけをしていくこと。
（「生徒の答えを板書する必要があったのか？」）

+ 自分では理解している、このように説明しよう、と思っていても、授業で説明することは全く別だった。

「社会保障は皆がより良く生きるため」と説明すれば良いと思っていたが、「より良く生きる」ということ自体が（大学生でも）ピンと来ていない」「（教職以外の学生は）『わからない』とはっきり言ってくれた」

（３）学生Aの学び②

【当日の学び】

+ 「導入が大事」と良く言われていたが、その意味がようやく分かった。

「（苫小牧駒沢大学の伊藤先生から）『朝鮮学校の生徒の直筆のメッセージはインパクトがあるので最初に持ってくるべき』と言われた。」

+ 生徒の背景をもっと理解して発問を考えるべきだった。

菊池さんが「小学生だったらもっと発言する」と言っていた。（自分は中学生、高校生相手だけれども）それを聞いてもっと生徒の気持ちを予測しなければいけないのかと思った。菊池さんの方が子ども達を見ているように思った。」

※学生Aが意識している「人の多様性」へのつながり

（４）学生Aの現在の課題

自分が大事だと思っていることと、相手が大事だと思っていないことが一致してしまう。そのミスマッチっていうんですかね。それは知識理解（を重要視した授業）では埋められない。
（略）どのように相手にとって、「あっ、面白い」と思ってもらえるか。

※この一年間の彼の一番大きな気づき「人の多様性」へのつながり

４．まとめと今後への課題

菊地達夫（北翔大学短期大学部）／齋藤眞宏（旭川大学）

まとめ（１）

【成果】

- 他校種志望の学生の模擬授業を見学することによって、これまでとは違う授業づくりの視点に気づくことができた。
- 学生たちはこの模擬授業交換会に参加することをきっかけのひとつとして、より多様な視点から自分の実践の問い直しをしている。

まとめ（２）

【課題】

- 現場の先生の参加等は連携校に声をかければ可能。
- 参加大学、学生数を広げることについてはこれまでも考えてきた課題である。
- 単なる授業技術にとどまらず、教育観や教師観の深化、広がりを目指すためには年１回ではなくもっと有機的なつながりを持たなければ不可能ではないか。
- 学生中心の組織によって運営できないか。

第２部　討論
地方小規模大学教職課程連携の可能性について

菊地達夫（北翔大学短期大学部）／齋藤眞宏（旭川大学）

討論課題

- 討論①　会場からの意見および話題提供（実践事例の紹介）等
- 討論②：グループ討論＆発表：地方小規模大学連携の可能性について

【討論課題】各グループで、先生方がご自分の地域で可能な／実施してみたい大学間連携を挙げてください。ある程度挙げていただいたらグループ毎に意見をまとめてください。